

ブラジュニャーカラグプタによる バルトリハリ批判 ——“sarvaṃ mithyā bravīmi”を巡って——

渡 辺 俊 和
(広 島 大 学)

は じ め に

ディグナーガ (ca. 480-540) は主著 *Pramāṇasamuccaya* において主張命題 (pakṣa) に「直接知覚の対象・推理・信頼できる者〔のことば〕・言語常識によって否定されないもの」という定義を与え、¹⁾ 逆にこれらによって否定されるものを疑似主張命題 (pakṣābhāsa) とした。彼は pakṣābhāsa の例の一つとして *Nyāyamukha* では「述べられたことは全て虚偽である」(sarvaṃ uktaṃ mṛṣā²⁾) という文を、PS では「文は全て、虚偽なる意味内容を有す」(sarvaṃ vākyam anṛtārtham) という文をそれぞれ挙げている。このような類いの文は「エピメニデスのパラドックス」と呼ばれるものと同じく、厳密にはパラドックスとは言えない。しかし、これらの文中の「全て」がその文自体を含む場合には時として矛盾を引き起こし得るので、このような文をどう扱うかは問題となる。

ヴァスバンドゥの著作と伝えられる如実論にも類似した議論が見られ、そこでは対論者の「述べられたことの全てを私は認めない」(一切所説我皆不許)³⁾ という言明が批判されている。一方でバルトリハリ (ca. 450-

510) は, Vākyapadiya 3.3.25で「私が言うことは全て虚偽である」(sarvaṃ mithyā bravīmi) という文が誤りとならないことを説明している。これに対しディグナーガは, NMu, PS で挙げた文をどちらも pak-
ṣābhāsa に分類している。⁴⁾ ただディグナーガの議論は, その構造からして
バルトリハリに対立するものではあるが, 真っ向からバルトリハリ批判を
行っている訳ではない。これに対してプラジュニャーカラグプタ (ca.
750-810) は, VP3.3.25をほぼそのままの形で引用して, バルトリハリ
批判を行っている。本稿は, 「私が言うことは全て虚偽である」という文
に対する諸論師の見解を, プラジュニャーカラグプタを中心にして明らか
にすることを目的とする。

1. バルトリハリによる解釈

バルトリハリは内属 (samavāya) を巡る議論で, 「内属は表現不可能
(avācya) である」という文中の「表現不可能」という語が一種のメタ言
語的なものであることを説明する際に,⁵⁾ 以下のように述べている。

「私が言うことは全て虚偽である」と〔発言する際〕, この文〔自体〕
は〔虚偽であると〕意図されてはいない。というのも, その〔文〕が
〔その文自身を〕虚偽であると表示しているのであれば, 〔その文によ
って〕扱われている意味内容が理解されないからである。⁶⁾

バルトリハリによれば, 発話行為というものは発話者の意図 (vivakṣā)
を聞き手に伝達するためのものである。つまり, 発話内容は発話者によっ
て伝達しようと意図されているものであり, 従って発話自体が虚偽となる
ことはない。⁷⁾ しかしこの場合, もし「全て」の中に当該の文が含まれるの
であれば, 自己言及の文となり, 聞き手はこの文によって何が意味されて

いるのかを確定することができず、コミュニケーションが成立しないことになってしまう。そこでバルトリハリは、

「私が言うことは全て虚偽である」…… (A)

という文で発話者が意図しているのは「私が言う、A以外の文は全て虚偽である」ということだと考える。⁸⁾つまり、文Aはそれ以外の文にとってメタレベルの文として用いられているのである。彼はこれを説明して以下のように述べる。

なぜなら (ca), 表示者 (vācaka) として起こっているものが〔同時に〕表示対象 (vācya) であることはない。それら (表示者と表示対象) のうち, [自身と] 異なるもの (表示対象) を伝達するものである⁹⁾それ (表示者) が〔表示者自身によって〕伝達されることはない。

文Aは表示者であり、それ以外の文が表示対象である。表示者が同時に表示対象となることはないので、文Aは自己言及をすることはなく、コミュニケーションにおいてその役割を果たしうるのである。このようにバルトリハリは、発話者の意図という視点を導入することにより、文Aを誤りのない文であると解釈するのである。

2. プラジュニャーカラグプタによる解釈

2.1 ダルマキールティとダルモットタラ

ディグナーガの後継者であるダルマキールティ (ca. 600-660) は Pramāṇavārttika IV で、〈本質因〉と〈結果因〉という彼独自の枠組みに沿ってディグナーガの pakṣābhāsa 説を再構成している。ダルマキールティは「自分自身の言葉」(svavacana) と「論書」(śāstra) とを「承認」(abhyupāya) という分類でひとまとめにしているが、その際に彼が

〈自分自身の言葉との矛盾〉の例として考えているのは、ディグナーガによって〈信頼できる者〔の言葉〕による否定〉の例として用いられていた「認識対象をその対象とするプラマーナはない」(na santi pramāṇāni prameyārthāni)¹⁰⁾である。また NB III 52でも〈自分自身の言葉による否定〉に触れるが、その例は「推理はプラマーナではない」(nānumānam pramāṇam)であり、ディグナーガが挙げていた「述べられたことは全て虚偽である」あるいは「文は全て、虚偽なる意味内容を有す」という文を挙げることはない。

ところでダルモッタラ (ca. 740-800) とブラジュニャーカラグプタは、先にバルトリハリが挙げた文 A を取り上げている。両者の説明とも、以下に挙げるダルマキールティによる PV IV 94 の記述を基にしている。

例えば〔発話者〕自身がプラマーナでなければ〔彼が〕言葉を発することはない。それと同様に、論書に確立されている事柄についての考察は、それ〔論書〕を拠り所としなければ〔起こら〕ない。¹¹⁾

ここで重要なのは ab 句である。つまりダルマキールティによれば、言葉が発せられる限り、発話者自身はそれをプラマーナとみなしているはずである、というのである。

そしてこれを前提とした上で、ダルモッタラは以下のように述べている。

すなわち、「私（話し手）の文に基づいてあなた（聞き手）に起こる意味理解は正しくない内容のものである」ということを示すのであれば、まさに文を発話者が述べることはないはずである。〔つまり、〕もし他者が理解する発話内容が正しくない内容なのであれば、発話は無意味となる。というのも、「私の言うことは全て虚偽である」と述べる人であっても、この文は正しい内容であると示そうとするがゆえ

にこそ文を発話するのだから。(i)もしこの文が正しい内容のものとして示されたとすると、〔発話者〕自身の他の諸々の文が正しくない内容のものであると示されたことになる。(ii)一方、同じこの〔文〕が正しくない内容であれば、諸々の他の〔発話者自身の文〕は正しくない内容であると示されることはない。そしてそれゆえ、発話する効果が全くないので、発話しないはずである。以上より、文によって生じる、文の意味を対象とする認識が正しい内容のものであることを示そうとするが故にこそ発話者は文を発話するのである。¹²⁾

ここでダルモットタは文Aを「発話者は言葉を、それを発する前から誤ったものとして述べることはあり得ない」ということの例として挙げている。そして(i)のように文Aが正しいものとして発せられた場合には、同一の発話者によって発せられる、文A以外の全ての文が虚偽のものであるということが理解される、と述べている。つまり彼は「発話者は言葉を発する限り、それをプラマーナとみなしている」というダルマキールティの見解に基づきつつも、バルトリハリと同様に、文Aはそれ以外の文が虚偽であることを表示するメタレベルの文であると言うに留まり、これを pak-¹³⁾śābhāsa に分類してはいないのである。

2.2 プラジュニャーカラグプタによるバルトリハリ批判

一方、プラジュニャーカラグプタはこれとは異なる見解を示している。彼はまず、PV IV 94を注釈して以下のように述べる。

もし〔発話者〕自身がプラマーナであるということを認めないのであれば、決して言葉が発せられないことになってしまう。例えば〔君Xが〕「私Xが言うことは全て虚偽である」と〔言う場合に、〕もし「私Xが言うであろうことはまったく全て虚偽だ」と君Xが仮に認めてい

るのであれば、述べられた「私Xが言うことは全て虚偽である」という文の〕意味は「私Xの言葉から理解されることは〔何も〕ない。私Xの言葉からは何もなされない」〔ということになる〕。そうするとどうなるのか。〔君X〕自身徒労に終わる。私達（聞き手）もである。なぜなら述べられなくともこのような「私Xの言葉から理解されることは〔何も〕ない。私Xの言葉からは何もなされない」という〕意味は既に〔君Xと私達聞き手とにとって〕成立しているのだから。¹⁴⁾

ここでプラジュニャーカラグプタは文Aを例にして、「発話者は自身をブラマーナと認めているはずである」というダルマキールティの見解を説明している。もし発話者が、彼自身の発言の全てが虚偽であると認めた上で「私の言うことは全て虚偽である」と発言しているならば、彼はそのような自己言及する文によって聞き手が何かを理解するとは考えない。つまり彼は自らの発言に効果がないことは分かっているのである。そしてそのような、発話者の言葉によって聞き手に何も理解されていない状態というのは、彼が発言する前の状態と何ら変わりがないのである。よって、発話者と聞き手の双方にとって発話者の発言は全く無駄なものとなるのである。従って、文Aについても、発話の有効性を認める限り、文Aは何かしら自身以外の表示対象を有すものであると認めなければならないのである。この時点ではまだバルトリハリ、ダルモータラの見解との差ははっきりしない。しかし彼はこれに続けて以下にバルトリハリ批判を開始する。

愚かさ（durvaidagdhya）によって知が取り除かれている（avadhūta）者から教わったこともまた、必ず取り除かれる（つまり否定される）。例えば、

「『私の言うことは全て虚偽である』と〔発言する際〕、この〔言明〕自体は否定されない。というのも、その〔文〕が〔その文自体を〕虚偽

であると表示しているのであれば、〔その文によって〕扱われている意味内容が成立しないからである。』という〔バルトリハリの見解は否定される¹⁵⁾〕。

若干の違いは有るものの、これは一見して VP3. 3. 25を念頭に置いたものであると理解できる。そしてこのような批判の理由をプラジュニャーカラグプタは以下のように偈でまとめている。

なぜなら、

また、〔「私の言うことは全て虚偽である」(A) という言明が〕 三時の〔どの話し手の言葉を〕 否定するとしても、この言葉 (A) は妥当ではない。というのも、〔否定対象となる三時の¹⁶⁾〕 言葉がプラマーナでないのであれば、〔落ちた菓子¹⁷⁾の泥を〕 洗い流した後に捨てる〔場合のように、そのプラマーナでない言葉を否定したとしても全く無駄である〕 のだから。(PVA165)

プラジュニャーカラグプタは文Aが否定する対象として、

(1)過去の私の発言 (2)現在の私の発言 (3)未来の私の発言

という三つを想定する。そして文Aがこれらのどれを否定する場合にも過失が生じてしまうことを指摘する。まず(1)について以下のように述べる。

もし、「〔私が過去に〕 言ったことは全て虚偽である」というような〔内容が文Aで〕 理解されるのであれば、自分自身の言葉と矛盾するので決して正しくない。言葉を発する者は、〔言葉を発する限りは〕 自分自身が〔その時には〕 プラマーナになったと認めている。従って、どうして彼(発話者)〔の発言〕が〔過去に〕 プラマーナでな〔かったと今になって〕 説明されようか。

【問】〔彼は過去の発言を〕 後悔して〔文Aを述べたのである。だから過去の発言はプラマーナではない〕。

【答】たとえそうであったとしても〔自分自身の発言との〕矛盾にしなければならない。何も言わない方がましである。〔過去の発言を否定するために〕骨折りして何のためになるというのか。

【問】よく考えずに〔文Aを述べ〕たのである。

【答】まさにこれ（よく考えないこと）こそが誤りである。熟考こそが正しいのだから。¹⁸⁾

過去の発言を文Aが否定すると考えた場合、発話者は過去の発言を、それを発言した際にはプラマーナであると認めていたはずであるので、それを後になって否定すれば〈自分自身の言葉との矛盾〉という過失となる。これはたとえ後になって過去の発言が誤ったものであったと気付いたとしても同様である。そしてブラジュニャーカラグプタは、そのような過失を避けるためにははじめからよく考えて発言すべきだ、と言う。このことが165偈で「泥の洗い流し」の格言（paṅkaprakṣālananyāya）を用いて説明されている。これは、「汚物に落ちた菓子拾い、汚物を洗い流したが、結局食わずにまた捨ててしまう」というような、全く無駄な行為を言い表すものである。¹⁹⁾

続いて彼は文Aが(2)現在の私の発言と(3)未来の私の発言とを否定すると仮定した場合の過失を述べる。

【問】「私が言うことは〔全て〕虚偽である」という〔発言〕は、現在と未来の〔私（話し手）の発言がプラマーナであることを〕否定しているのである。

【答】たとえそのような場合であっても、このように〔「私が言うことは全て虚偽である」と〕述べて一体何のためになるというのか。²⁰⁾

もし文Aが(2)現在の私の発言を否定すると仮定した場合、PV IV 94でも述べられていたように発話者は文Aをプラマーナとして述べるのが前提

なのであるから、それを否定するのであれば文Aははじめから述べられる必要はない。また(3)未来の私の発言が否定対象であると仮定した場合、未来に誤った文を述べないようにすればよいので、この場合にも文Aを述べる必要は全くないのである。

また(3)未来の私の発言が否定対象となる場合について、さらに以下のよう

に述べられる。
ところで、未来〔の私（話し手）の言葉〕には〔今は〕まさに聞き手
がいない。従って〔話し手の未来の言葉を否定する〕言葉（文A）は
一体何のためのものなのか。

【問】大道芸人の唄（cāraṇacarcari）の言葉〔が聞き手がなくとも戯
れに唄い、発せられるの〕と同様に、誤りではない。

【答】〔その喩えは正しく〕ない。なぜなら〔当該の状況は〕論議の場
（vādaprastāva）なのだから。というのも論議の目的は事実(vastu）
の確定なのだから。それゆえ、それ（「私が言うことは全て虚偽であ
る」²¹⁾という発言）は正しくない²²⁾のである。

文Aが発話された時点では、Aより未来の文はまだ存在しておらず、当然
聞き手はいない。従って文Aには必要性がない。しかし対論者は、聞き手
がいなくとも発せられる「大道芸人の唄」を例として反論する。これに対
してプラジュニャーカラグプタは、当該の文Aは聞き手に向かって述べら
れた文であるので、そのような例は適切ではないと答えている。彼はこれ
を「論議の場」（vādaprastāva）という言葉で説明しているが、これは聞
き手がいるような、通常のコミュニケーションの場を言い表すものだと考
えられる。

以上見てきたようにプラジュニャーカラグプタは、文Aが否定する対象
を(1)過去(2)現在(3)未来という三つの時間に属する文に分けて考察し、その

どの場合にも過失が起こることを指摘することによってバルトリハリを批判している。バルトリハリは「発話者の意図」を考慮することにより文Aの有意味性を説明した。一方プラジュニャーカラグプタは「発話には発話者がプラマーナであることが前提とされる」というダルマキールティの説明を援用しつつ、それを文Aだけではなく、三時に属する全ての文にまで敷衍した。この結果、バルトリハリによっては有意味性を保証された文Aは、それが否定対象とするはずであった他の文と必然的に矛盾を引き起こすものとなったのである。

3. 結 び

バルトリハリは「発話者の意図」という視点を導入することにより「私の言うことは全て虚偽である」(A)という文が誤った文でないことを説明している。つまり文Aは、同じ発話者によって述べられる、A以外の文をその表示対象とするものであり、従って「この文以外の私の言うことは全て虚偽である」という意味を表すものであると主張したのである。

ディグナーガとは異なり、ダルマキールティはこのような類いの文を扱うことはしなかった。ただ彼は、バルトリハリの見解とも似た、「発話者は言葉を発する限り、それをプラマーナとみなしている」という見解を提示している。これを前提とした上で、彼の注釈者達はバルトリハリが挙げた文について言及している。

しかしダルモッタラはこれを pakṣābhāsa には分類せず、バルトリハリと同様の見解を提示している。一方プラジュニャーカラグプタは、ダルモッタラと同じくダルマキールティの見解に依拠しながらも、バルトリハリの見解を真っ向から批判する。プラジュニャーカラグプタは、ディグ

ナーガがそうしていたように、文Aを pakṣābhāsa に分類する。その方法は「発話者は自身の発言をプラマーナとみなす」というダルマキールティの見解を文Aだけでなく、それが否定対象とする全ての文にも適用することによってそれらの文の間に必然的に矛盾が起こることを指摘するというものであった。

【テキスト・参考文献】

- D Derge edition.
HBṬĀ *Hetubinduṭīkāloka* (Durvekamiśra): Sukhlalji Sanghavi and Shri Jinavijayaji, eds. Gaekwad's Oriental Series No.113. Baroda, 1949.
Helārāja *Prakāśa* (Helārāja): K. A. Subramania Iyer ed. Deccan College Monograph Series 21. Poona, 1963.
PS *Pramāṇasamuccaya* (Dignāga).
PV IV *Pramāṇavārttika* chapter 4 (Dharmakīrti): See Tillemans 2000.
Ms Manuscript B of PVA: S. Watanabe ed. Patna-Narita, 1998.
NB *Nyāyabindu* (Dharmakīrti): See NBṬ.
NBṬ *Nyāyabinduṭīkā* (Dharmottara): Dalsukhabhai Malvania, ed. Tibetan Sanskrit Works Series 2. Kashiprasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1971.
NMu *Nyāyamukha* (Dignāga): See 桂 1977.
P Peking edition.
PVA *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (Prajñākaragupta): Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. Tibetan Sanskrit Works Series 1. Patna, 1953.
S Sāṅkṛtyāyana's edition of PVA.
T Tibetan translation of PVA.
Y *Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā Supariśuddhī* (Yamāri): D4226, P5723.
如実論 如實論反質難品：大正32 (No. 1633)
稲見正浩 (Inami, Masahiro) 1991 On pakṣābhāsa. In Ernst Steinkellner (ed.) *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition*. Wien.
桂 紹隆 1977 「因明正理門論研究 〔一〕」(『広島大学文学部紀要』37, pp. 106-126)

- 谷沢淳三 1987 「インド哲学で説かれたうそつきパラドックスの議論——Bhartṛhari を中心に」(高崎直道博士還暦記念論集 インド学仏教学論集 春秋社)
- 渡辺俊和 (Watanabe, Toshikazu) 2006 「ディグナーガの pakṣābhāsa 説——svarūpa と viśeṣa による分類について——」(『印度学仏教学研究』55-1, pp. 422-429.)
- forthcoming Dignāga's View on the Liar Paradox, In *Proceeding of International Conference on Logic, Navya-Nyāya and Applications; A Homage to Bimal Krishna Matilal*.
- Houben, Jan E.M. 1995 *The Sambandha-Samuddeśa (Chapter on Relation) and Bhartṛhari's philosophy of Language*, Egbert Forsten, Groningen.
- Tillemans, Tom J. F. 2000 *Dharmakīrti's Pramāṇavārttika; An annotated translation of the fourth chapter (parārthānumāna) Volume 1 (k.1-148)*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.

【注】

- 1) PS III 2b'cd: anirākṛtaḥ / pratyakṣārthānumānāptaprasiddhena svadharṃiṇi // See Inami 1991.
- 2) NMu §1. 3: 若非違義言声所遣, 如立一切言皆是妄。(=PVA526, 19: yadi viruddhārthavācīnā (Ms: °vādinām S) svavacanena bādhyate / yathā sarvaṃ uktaṃ mṛṣeti /)
- 3) 大正32.30b17-23: 若汝言一切所説我皆不許。我今共汝辯決是處。汝説不許一切。此説爲入一切數。爲不入一切數。若入一切數。汝則自不許汝所説。若自不許者我義則是汝所許。我義自成。汝言便壞。若不入一切數者。則無一切。若無一切汝不許一切。若不許一切。我義便非汝不許。我義亦成。汝言終壞。
- 4) PS での議論については拙稿 (渡辺 2006, Watanabe [forthcoming]) を参照されたい。
- 5) 谷沢 1987, Houben 1995を参照。
- 6) VP3. 3. 25: sarvaṃ mithyā bravīmi naitad vākyaṃ vivakṣyate / tasya mithyābhidhāne hi prakrānto 'rtho na gamyate //
- 7) このような見解はディグナーガにも, そして後に論じるようにダルマキールティにも共通するものであるが, 興味深いことに如実論にも同様の見

解（T32. 29a18：有言説無道理。此二相違。譬如童女有兒。）が見いだされる。如実論での議論とディグナーガなどとの類似点については別の機会に考察したい。

- 8) See Helārāja on VP3. 3. 25: svavākyānām asatyārthatāpratipādanāya **sarvam** ahaṃ **mithyā bravīmīty** ukte 'syāpi vākyatvān mithyārthatā na prasañjaniyā / evaṃ **hi prakrāntaṃ** vivakṣitaṃ svavākyāntarāṇāṃ (em.: svāvākyāntarāṇāṃ ed.) mithyātvaṃ **na** pratīyeta /
- 9) VP3. 3. 26: na ca vācakarūpeṇa pravṛttasyāsti vācyatā / pratipādyam na tat tatra yenānyat pratipādyate //
- 10) See Tillemans 2000: 136-137.
- 11) PV IV 94: yathātmano 'pramāṇatve vacanaṃ na pravartate / śās-trasiddhe tathā nārthe vicāras tadanāśraye // Cf. PVin III on k.27cd.
- 12) NBT 185, 5-11: tathā hi madvākyād yo 'rthasampratyaayas tavotpadyate so 'satyārtha iti darśayan vākyam eva noccārayed vaktā / vacanārthaś ced asatyaḥ pareṇa jñātavyaḥ, vacanam apārthakam / yo 'pi hi sarvaṃ mithyā bravīmīti vakti so 'py asya vākyasya satyārthatvam ādarśayann eva vākyam uccārayati / yady etad vākyam satyārtham ādarśitaṃ, evaṃ vākyāntarāṇy ātmīyāny asatyārthāni darśitāni bhavanti / etad eva tu yady asatyārtham, anyāny asatyārthāni na darśitāni bhavanti / tataś ca na kiñcid uccāraṇasya phalam iti noccārayet / tasmād vākyaprabhavaṃ vākyārthālambanaṃ vijñānaṃ satyārthaṃ darśayann eva vaktā vākyam uccārayati /
- 13) Cf. 谷沢 1987: 160.
- 14) PVA524, 19-22: yady ātmanaḥ pramāṇatvaṃ nopeyāt, vacanāpravartanam eva prasaktaṃ / yathā sarvaṃ mithyā bravīmīti yadi sarvam eva mithyā vaktavyaṃ mayeti bhavato 'bhyupagamaḥ, tad ayaṃ bhāṣitasyārthaḥ — na madvacanāt pratyeyam, na madvacanāt kiñcit kartavyam / evaṃ tarhi kim, ātmā parikleśito vayaṃ cāvacane 'py asyārthasya siddhatvāt /

当該箇所は注釈もなく難解である。本文中の訳では、「君」を発話者とし、さらにその発話中の「私」(mayā, mad-) も同じ発話者を指すものとして理解した。これは PV IV 94ab でも述べられているように、「自身をプラマーナであることを認めない」のは発話者であるという理由からである。しかし「君」が「聞き手」を指し、「私」が「発話者」を指すというように両者を別の者と考えると以下のようにも訳することができる（下線部は本文中の

翻訳と異なる箇所を示す)：

「もし〔発話者〕自身がプラマーナであることを認めないのであれば、決して言葉が発せられないことになってしまう。例えば〔私Xが〕『私Xが言うことは全て虚偽である』と〔言う場合に、〕もし『私Xが言うであろうことは全く全て虚偽だ』と君Yが仮に認めているのであれば、述べられた『私Xが言うことは全て虚偽である』という文の〕意味は『私Xの言葉から理解されることは〔何も〕ない。私Xの言葉からは何もなされない』〔ということになる〕。そうするとどうなるのか。〔私X〕自身徒労に終わる。私達(XとY)もである。なぜなら述べられなくともこのような『私Xが言うであろうことは全く全て虚偽だ』という〕意味は既に〔XとYとの両者にとって〕成立しているのだから。」

このように解釈した場合には“avacane 'py asyārthasya siddhatvāt”の箇所をより容易に理解できるかもしれない。しかし上にも述べたように、この箇所のPVAでは発話者が自身をプラマーナと認めない場合が述べられていると理解したので、この訳は採用しなかった。またこの訳の場合には“vayaṃ ca”の箇所で再度発話者Xが挙げられるのに不自然さが残るように思われる(ただし“vayaṃ”が「私」と「君」との二者を表すことはA1.2.59: asmado dvayoś ca //によって正当化される)。また、チベット訳も“tad ayam ... parikleśito vayaṃ ca”の箇所が、以下に挙げるようにサンスクリットと対応しない。T(D173a7-173b1, P207a7-8, sNar thang No. 3711 The 199b7-200a2): de'i tshig las ni rtogs par bya ba yin te / nga'i (DP; de'i N)tshig las ni cung zad kyang bya ba ma yin no zhes bya ba'i don 'di brjod par 'gyur ro // de lta na ni bdag nyid du kho bo cag ngal bar byas nas te /)

- 15) PVA524,22-24: yad api durvaidagdhya'avadhūṭadhiyo 'dhītaṃ tad apy avadhūtaṃ eva / yathā / “sarvaṃ mithyā bravīmiti* naitad eva niṣidhyate / tasya mithyābhīdhāne hi prakrānto 'rtho na sidhyati //” iti / (* bravīmiti Ms (B259a6); prabravīmiti S)
- 16) Y (D66a5, P80a7): gal te dus gsum na yod pa thams cad tshad ma ma yin na de'i tshe de dag brjod pas ci bya / (もし、三時に存在する〔私(話し手)の言葉の〕全てがプラマーナでないなら、それらを述べるのが何になろうか。)
- 17) PVA524, 24-26: yataḥ / kālatrayaṇiṣedhe 'pi na caitat saṅgataṃ vacaḥ / aprāmāṇye hi vacasaḥ prakṣālyāpanayo* bhavet //165// (*

prakṣālyāpanayo Ms(B259a6), brkus nas bor bar T; prakhyātyāpanayo S)

- 18) PVA524, 27-525, 3: yady evaṃ pratipadyeta sarvam uktaṃ mṛṣā, svavacanavirodhād ayuktir eva / pravartayatā vacanam ātmā pramāṇatām gato 'bhyupagataḥ / tataḥ kathaṃ tasyāprāmāṇya-pratipādanam / paścāttāpād iti cet / tathāpi virodha eva / avacanam eva varam, kim āyāsenā / aparyālocya kṛtam iti cet / nanv ayam eva doṣaḥ / paryālocanam eva nyāyyaḥ* / (*nyāyyaḥ em. cf. legs pa Y(D66 b1, P80b2); nyāyaḥ S, Ms, brtags pa la sogs pa T)
- 19) Y(D66a5-7, P80a7-80b1): **bkrus nas** zhes smos so // rkyag pa'i nang du lung ba'i la du len pa la / khyod ci byed ces 'ga' zhig gis (D: om. (gis) P) dris pa na (D: dang P) / des de la bkrus nas dor bar bya'o zhes zer ba de dang 'dra bar dus gsum na yod pa'i brjod pa yang tshad mar brjod nas phyis tshig de tshad ma ma yin par byas nas dor par bya'o zhes bya bar 'gyur ro // 【答】『洗い流した後に』と答える。汚物の中に落ちた菓子を取る際に、「あなたはどうするのか」と誰かに訊ねられた時、彼が「それ（汚物）を洗い流した後に捨てる」と〔答える〕。それと同じように、三時に存在する〔私（話し手）の〕言葉も、プラマーナであると述べた後に、その言葉がプラマーナでないと〔述べ〕て捨てる〔のも全く無駄なことである〕。またこれは「物乞いの菓子」の格言 (parivrāḍmadakanyāya) と呼ばれるものであり、HBṬĀ272(-278), 28-279, 2にその説明がある。さらにこの格言が *Madhyamakahrdayakārikā* V 54cd にも用いられていることを、信州大学の護山真也准教授からの私信にて知った。ここに記して謝意を表したい。
- 20) PVA525, 3: atha vartamānānāgataniṣedha idaṃ bravīmi mithyā / tadāpi kim anenoktena /
- 21) See Y(D66b4, P80b8): **de** ni zhes bya ba ni tshig tshad ma ma yin par ston pa'o //
- 22) PVA525, 4-6: bhāvini tu śrotaiva nāstīti* kimarthaṃ vacanam / cāraṇacarcarivacanavad adoṣa iti cet / na / vādaprastāvāt / vastunir-ṇayo hi vādasyārthaḥ / tasmād asad etat / (*nāstīti em. cf. (med pas) T; nāsti S, Ms.)

(平成19年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部）

